

七条中学校だより7月13号

京都市立七条中学校

令和8年7月16日

発行:校長 林 秀雄

夏休みに「小さな挑戦」を

いよいよ夏休みが始まります。皆さんは、この夏をどのように過ごそうと考えているでしょうか。夏休みは、学校生活とは少し違った時間です。毎日決まった時間割に沿って行動するのではなく、自分で時間を計画し、自分で使い方を決めることができます。自由な時間が増える一方で、その時間をどのように過ごすかは、自分自身に委ねられています。そして、その積み重ねによって、夏休みの充実度は大きく変わってきます。そこで皆さんにお願いしたいことがあります。それは、この夏休みに「小さな挑戦」を一つしてほしいということです。

挑戦というと、「難しい資格に挑む」「大きな大会で優勝を目指す」といった特別なことを思い浮かべる人もいるかもしれません。しかし、私が皆さんに勧めたいのは、もっと身近で、もっと小さな挑戦です。例えば、「毎日15分読書をする」「朝6時30分に起きる」「1日1ページ英単語を覚える」「家の手伝いを続ける」「毎日散歩や運動をする」といったことでも十分です。大切なのは、その目標が大きい小さいかではありません。自分で目標を決め、その目標に向かって毎日継続して取り組むことです。

私たちは、何かを始めることは比較的簡単にできます。しかし、それを続けることは決して簡単ではありません。最初は意欲にあふれていても、暑さや疲れ、あるいは「今日はいいか」という気持ちに負けてしまうことがあります。だからこそ、毎日続けることには大きな価値があります。一日だけ頑張るのではなく、小さな努力を積み重ねることで、人は成長していきます。毎日の読書なら数十ページが一冊の本になり、毎日の練習なら少しずつ技術の向上につながります。最初は小さな変化でも、続けることで大きな成果へとつながっていくのです。

また、目標に向かって努力した経験は、自分への自信にもなります。「最後までやりきれた」「毎日続けられた」という達成感は、皆さんのこれからの学校生活や将来にとって大きな力になるはずです。たとえ途中で思うようにできない日があったとしても、そこで諦める必要はありません。次の日にまた挑戦を続けられればよいのです。

夏休みは、自分自身を成長させる絶好の機会です。誰かと比べる必要はありません。自分で決めた目標に向かって、一歩ずつ進んでください。小さな挑戦を続けた先には、今までより少し成長した自分との出会いが待っています。二学期の始業式で、皆さんがそれぞれの「小さな挑戦」の成果や思い出を胸に、元気な姿で登校してくれることを楽しみにしています。充実した、実り多い夏休みになることを願っています。

千年以上受け継がれる祈り ― 祇園祭の歴史

京都の夏を彩る祇園祭は、日本を代表する祭りの一つです。毎年7月になると、豪華な山鉾が都大路を巡り、多くの人々にぎわいます。しかし、祇園祭は単なる華やかな祭りではありません。その始まりには、人々の命を守ろうとする強い願いが込められています。

祇園祭の起源は、今から1150年以上前の869年（貞観11年）にさかのぼります。当時の京都では疫病が流行し、多くの人々が苦しんでいました。そこで朝廷は、全国66か国の数になぞらえて66本の矛を立て、神泉苑（しんせんえん）で疫病退散を祈願する「祇園御霊会（ぎおんごりょうえ）」を行いました。これが現在の祇園祭の始まりとされています。その後、祇園御霊会は毎年行われるようになり、平安時代から鎌倉時代にかけて祭りは次第に発展しました。現在の山鉾巡行の原型もこの頃に形づくられたと考えられています。山鉾は疫病や災厄（さいやく）を鎮めるための依り代（よりしろ・神霊や魂が寄り付く対象となるモノや場所のこと）であり、人々の無病息災への願いを表していました。しかし、長い歴史の中では困難もありました。1467年に始まった応仁の乱によって京都の町は大きな被害を受け、祇園祭も中断を余儀なくされました。それでも町衆の努力によって1500年に復活し、その後も火災や戦争を乗り越えながら受け継がれてきました。今日まで続いているのは、多くの人々が祭りを守り育ててきたからです。

祇園祭は「動く美術館」とも呼ばれます。山鉾には国内外から集められた美しい織物や工芸品が飾られ、京都の伝統文化の粋を見ることができます。また、その根底には「みんなが健康で平和に暮らせよう」という願いがあります。

私たちが暮らす京都には、このような世界に誇る文化遺産があります。今年の祇園祭を眺めるときは、豪華な山鉾だけでなく、千年以上にわたって受け継がれてきた人々の祈りや努力にも思いをはせてほしいと思います。伝統を学び、受け継ぐことは、未来の京都を支える大切な力になるでしょう。